

自分の脆さや弱さを認めることから

新堀 由美子

目に見えない感染症が世界を覆っている。人との間には距離、どこに行っても入口で検温、手に触れるものは消毒の日々。目に映るのはマスクをつけ黙々と動く人の姿。これは現実なのかと時に思う。心の理解が追いつかない。

私の職場である男女共同参画センター横浜は、今年の3月から5月末まで閉館となったが、市民向けの電話相談は通常どおり継続した。内容には「外出して大丈夫か」「介護職なのにマスクがなくて困る」「これからの生活がどうなるのか心配」など、感染症への不安が色濃く表れた。

事態が長期化すると、一変した生活の「ひずみ」が見えてきた。在宅勤務で家族それぞれにストレスがかかり、葛藤が生じ暴力となって現れる。望まぬ性行為の強要の相談もあった。高齢者や障害のある方が行き場や活動の場を失い、本人や同居家族の孤立、心身の健康が損なわれる例もあった。

長らく相談現場にいて感じることだが、コロナ禍には暴力被害との共通項がある。どちらも心の準備なく襲われて、自分でコントロールできることが少ない。渦中にいると、先が見えないことで恐怖や無力感を覚える。また、コロナ禍で話題になった「自粛警察」は、ヘイトクライムやDVと似ているところがある。どちらも、自分の信念こそ正しいと信じている人が、秩序が乱されることへの不安や恐れから、他者に同調圧力をかけ、攻撃し、支配する。その攻撃は正義や常識、愛の名を借りることもあるため、被害を受ける側にとって、それが暴力だとは認識しづらいものである。

人ひとりには弱い。数々の自然災害、新型コロナウイルスでそれを思い知らされた。そして皮肉にも、自分の脆さや弱さを認めないことが暴力を生む。だからこそ私たちには、誰かと語り合い、さまざまな他者とともに生きる日々が大切だ。助けを求めてよい、弱音を吐いてよい、脆くて当たり前。自分にそれを何度でも言い聞かせることが、見えない暴力、内なる暴力と闘う大切な一歩になる。



PROFILE

にいぼりゆみこ：男女共同参画センター横浜相談センター長。5年間のメーカー勤務のち、男女平等の社会づくりを志向し1997年に（公財）横浜市男女共同参画推進協会入職。「働く女性のための相談」「性別による差別等の相談」「心とからだと生き方の総合相談」「女性に対する暴力電話相談」等、さまざまな相談事業に従事。著書に「システムに支えられた相談事業」（『相談のカー男女共同参画社会と相談員の仕事』第3章、明石書店、2016）。